

< 学術論文 >

引用形式が名詞句をつなぐ表現について — 「という」「といった」「とかいう」について —

岩男考哲¹ 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：連体修飾，という，といった，とかいう

1. はじめに

日本語の連体修飾構造は修飾部が主名詞に前接することは周知のとおりであるが、その両者をつなぐ形式には幾つかの種類が存在する。具体的には、修飾部と主名詞とが何も介さずに接続する「基本型修飾表現（益岡 2002）」と呼ばれるもの（1）、「との，という，といった，って」等の引用形式由来の複合辞によって接続するもの（2）、「ような，みたいな」等の機能語によって接続するもの（3）等、多岐にわたる。

- (1) 小さな頃に聞いた話
- (2) あの家にはもう誰も住んでいないという話だ。
- (3) まるで嘘 (のような／みたいな) 話。

これらの中で本稿が注目するのは、「という／といった」、そして「とか」を使った引用形式である「とかいう」等の引用形式由来の複合辞である。その中でも特に、これらの形式が名詞句と名詞句をつなぐ用法についての考察を行いたい。具体例には以下のようなものがある（BCCWJ²より）。

- (4) ラニスタというのは、剣技（師範）という意味であるが（略）
- (5) そもそも易は、干ばつや氾濫といった自然災害を予想することから生まれたはずだ。
- (6) 平田とかいう理事から電話があつてね。

近年、「という」をめぐるのは、修飾部が節の形をとる連体修飾節の研究が盛んに行われてきた。もちろん、そういった研究の中には、本研究が扱うような名詞句と名詞句を「という／といった」がつなぐ表現も周縁的に扱った研究も存在するが（大島 2010, 本多 1996, 益岡 2002 等）、「NP1 引用形式 NP2」という表現を考察の中心に据えたものはあまり見られないようである。しかし、後述するように、これらの表現にもまだ残された問題は残っている。それを本稿で提示し、その問題の解決を試みたい。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節で「という」と「といった」の違いを先行研究に基づきながら確認する。その結果、両者の間には各形式の前接部（NP1）が複数である

¹ rockman@shinshu-u.ac.jp

² BCCWJ とは「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を表す。

か否かの違いがあることが明らかになるだろう。次いで3節では「とかいう」という形式の観察をする。管見の限りでは、この「とかいう」が名詞句をつなぐ表現についての先行研究は存在しない。そこで、「とか」についての研究である森山(1995,1997)を頼りに、「とかいう」という形式を理解していく。その結果、「といた」と「とかいう」にはNP1の位置に生起する名詞句が複数であるといった共通点があることが明らかになる。すると、これまでの考察より、「といた」「とかいう」の両形式が表す複数の名詞句の異同は何かという問題が浮上する。そこで4節でこの問題に対する本稿なりの考察を行いたい。5節は本稿のまとめである。

2. 「という」と「といた」について

本節では、「という」「といた」を扱った先行研究を概観し、この両者の意味・機能を理解する。

2.1 名詞句をつなぐ「という」について

まずは、「NP1 という NP2」と直接関わりのある研究の一部を概観する。

従来、引用形式の前接部が節である連体節を扱った研究では、「という」が介在する表現は「内容節」と呼ばれ、主名詞(NP2)の内容を述べるものとされてきた(寺村 1992, 益岡 2002 等)。以下のような例がそれにあたる(益岡 2002 より)。

(7) 逆境に負けてはいけないという言葉

(8) 政治家が業者から賄賂をもらったという事実

それに対して、「NP1 という NP2」には「同格」と「内容説明」とがあることが国立国語研究所(1951)で指摘されている。ただし、国立国語研究所(1951)ではこの「同格」や「内容説明」といった概念の内実については触れられていない。しかし、それを受けた藤田(2000)に「同格」について『A トイウ B』の形でAとBの指示対象が同一であることを示す用法(p.407)³という説明が見られる。具体例として以下のものが挙げられる(国立国語研究所 1951 より)。

(9) 中心人物はディック・ヌージェントと云う人気のある画家だ。

(10) ラジオ気象学という言葉が散見し出した。

藤田(2000)の分析に基づけば、(9)の文脈では「ディック・ヌージェント」が指す人物と「人気のある画家」が指す人物が同一であることから「同格」の例となり、(10)は「言葉」の「内容説明」を修飾部「ラジオ気象学」が行っているとなるだろう⁴。

以上、まずは「NP1 という NP2」には「同格」と「内容説明」という2つの働きが指摘されていることを確認した。

2.2 名詞句をつなぐ「という」と「といた」について

次に、「という」「といた」の比較を行っている先行研究ではこの両者の差異がどのよ

³ 「同格」という概念については、小林(1996)も参照されたい。

⁴ 藤田(2000)では、「同格」と「内容説明」の統語的な差異についての言及もある。この点については後述する。

引用形式が名詞句をつなぐ表現について

うに述べられているかを概観する。

「という」と「といった」について考えるにあたって扱うべき研究に藤田(2000)がある。そこでまずは、その内容を確認するところから始めたい。

藤田(2000)は「という」と「といった」について、次のようにまとめている (p.406)。

- ・「トイウ」…上接項を唯一指定的にもち出す。
- ・「トイッタ」…上接項を類例事項を含む幅をもたせてもち出す。

これは例えば、次の例であれば (11) は「という」の前接項 (ロジャー・メーチン) が唯一のものであるのに対して、(12) は複数の類例の項 (アメリカ, フランス, 西ドイツ) が提示されているということである⁵ (藤田 2000 より)。

(11) わたしの年下の友人で、ロジャー・メーチンというイギリスの青年がいましたね。

(12) アメリカ, フランス, 西ドイツといった国

こうした藤田(2000)の指摘に基づいて、更に例を観察してみよう。

(13) さっき、田中 (という/*といった) 人が来たよ。

(14) 京都にエレファントファクトリー (という/*といった) 喫茶店があるらしいよ。

この例において「といった」の容認度が低い理由を藤田(2000)の指摘に基づいて考えてみたい。この文脈で「人」や「喫茶店」という名詞の指示する対象は通常、1つだと考えられる。その唯一の存在であるはずの「田中」「エレファントファクトリー」を類例事項が他に存在するものとして扱っているために容認度が低くなるということになる。

ところが、同じ「NP1 (という/といった) NP2」であっても先ほどとは容認度が異なる例も存在する。

(15) 彼は感無量 (という/といった) 表情を作って見せた。

(16) 無垢なる子ども (という/といった) 幻想を抱く。

これも前接項は1つだが、(13)(14)と比べると「といった」の容認度は低くない。こうした例の存在は一見、先の藤田(2000)の指摘の不備を示すものであるかのようにも思える。しかし、これも藤田(2000)の議論を発展させることで説明が可能であると本稿は考える。本研究の説明は次のようである。例えば(15)をとりあげて説明すると、この文で提示された「感無量」とは、表情の解釈の1つにすぎない。他にも「満足」の表情である可能性も、「感動」

⁵ 日本語記述文法研究会編(2008)にも「といった」について次のような説明がある。

「といった」は、修飾名詞が複数示されており、明示されている以上の要素が暗示されている場合に用いられる。(p.45)

ただし、「明示されている以上の要素が暗示されている」か否かという点については日本語記述文法研究会編(2008)と藤田(2000)は意見を異にするのだが、本稿ではこの点についての議論は行わない。

の表情である可能性も残されている。そういった類例事項が背後に存在するがために、(15)も表現上は前接項が1つであるが容認度は高いままだと言えるのである⁶。

この分析をサポートするために注目したいのは(15)が他者の表情について語っている点である。他者の表情であるために、当該の表情が感無量を表すものなのか否かは定かではない。そのため、他の事項も考えられる「と~~い~~った」の容認度が上がると考えられるのである。現に、これを自分自身の表情について語っている文脈を作ると「と~~い~~った」の容認度は下がる。

(15') 私は感無量(という/??~~と~~い~~っ~~た)表情を作~~っ~~て見~~せ~~た。

これは、自分自身の表情であれば「感無量」が唯一の(その表情の)意味と定められるため、複数の類例事項が存在することを示す「と~~い~~った」の意味とは合致しないためだと説明できる。

以上、藤田(2000)の指摘を概観し、その指摘に基づけば「という」「と~~い~~った」をめぐる諸現象の説明が可能であることを確認した。

3. 「とかいう」について

続いて本節では、「とか」を含んだ引用形式である「とかいう」を取り上げる⁷。しかし、名詞句と名詞句をつなぐ「とかいう」という形式についての詳しい考察は管見の限りでは見当たらない。そこでここでは、「とかいう」の構成要素である「とか」についての先行研究をとりあげる。

「とか」についての詳しい研究には森山(1995,1997)がある。その中で「とか」は「引用的な『と』に選択並列の『か』が組み合わさったもの(森山 1995,p.140)」とされており、その働きは「適切な表現内容の構成のための候補例を挙げる(p.141)」と言われている。具体例としては次のようなものが挙げられる(森山 1995 より)。

(17) そんなことありませんよ、とかなん~~と~~か言~~っ~~て。

(18) おれにこんな事件をあてが~~っ~~と~~い~~て、お偉いさん方は、ファッションモデル殺人事件とか、スチュワーデス殺人事件だとか、きれいどころを独占してんだぜ。

こうした例を通して森山(1995)は「とか」について「適切な表現のための候補例を挙げる」と述べる。例えば、(17)であれば、「そんなことありませんよ」が「仮に挙げられた、表現の一候補に過ぎない(p.140)」ことになる。つまり、他にも「そんなことないよ」や「そんなことあるわけないだろう」、「そんなことねえよ」等といった候補が存在することを示しているということになる。

このように「とか」の前接項は表現の候補の1つにすぎない、つまり他の表現候補も存在することを表すということになる。するとここで、他にも前接項が存在する、つまり前

⁶ 逆にこの場合の「という」は「感無量」という解釈に疑問の余地が無いことを示していると言える。

⁷ この他に「とか~~い~~った」という形式も存在するが、今回は考察の対象からは外す。

引用形式が名詞句をつなぐ表現について

接項が複数存在するという指摘が先に見た「といた」¹³と類似した性質であることが分かる。この点については、4節で考察する。

そして、この「とか」も「いう」に前接して名詞を修飾するのである（BCCWJより）。

- (19) 主人が勤めていた小学校の訓導の一人で、結城とかいう先生が火つけ役だったそうです。

以上、本節では「とか」＋「いう」にも複数の前接項が想定できる点と「NP1とかいうNP2」の用法が存在する点を確認した。ここから分かることは、先程も述べたように、「NP1とかいうNP2」も「NP1が複数存在する」という点で「NP1といたNP2」と類似しているという点である。それでは、この両者は同じ働きをする表現なのであろうか。以下では、この疑問に答えるべく、両者の異同を中心に、「という」「といた」「とかいう」間の関係について考察していく。

4. 「という」「といた」と「とかいう」

本節ではこれまでの議論を受けて、「という」「といた」と「とかいう」の比較を行う。その結果、「という」と「といた」は藤田(2000)の指摘にあるように、前接項が唯一か複数の候補が存在するかという点で対立しており、「といた」と「とかいう」は前接項に同じ複数の候補があっても、指示対象に言及しているのか、言語表現そのものに言及しているのか、という点において対立していることを述べる。

先に「という」「といた」の違いを確認するために用いた例文に「とかいう」を用いると以下のようなになる。

- (13') さっき、田中（という/*といた/とかいう）人が来たよ。

- (14') エレファントファクトリー （という/*といた/とかいう） 喫茶店があるらしい。

- (15') 彼は感無量（という/といた/*とかいう）表情を作って見せた。

- (16') 無垢なる子ども（という/といた/*とかいう） 幻想を抱く。

この差異に基づいて以下、「という」「といた」「とかいう」の関係について考察していくのだが、具体的な分析に入る前に、藤田(2000)で提示された「NP1というNP2」が「同格」であるのか「内容説明」であるのかを見分けるためのテストを紹介しておきたい。

藤田(2000)は「NP1というNP2」が「同格」なのか「内容説明」であるのかを判断するためのテストとして、その「という」が「といた」と置き換えができるか否かに注目する案を提示している。つまり、置き換えが可能ならば「内容説明」、不可能ならば「同格」とするのである。以下の例で説明する（例は藤田2000より）。

- (20) 堤という男

- (20)* 堤といた男

これは「といた」との置き換えができないので、藤田(2000)のテストによれば「同格」ということになる。その置き換えによって両者を見分けることができることの根拠は、藤田

(2000)の述べる「同格」の性質による。藤田(2000)によれば「同格」とはNP1とNP2の指示対象が同一であるということであった。それにも関わらず、単数であるNP2と同一の事物を指すNP1が複数であるのはおかしい、ということである。

以上が藤田(2000)の述べる「NP1というNP2」が「同格」であるのか「内容説明」であるのかを見分ける手段とその理由である。以下では、この分類に基づきながら「という」「といった」「とかいう」間の関係についての考察を行っていく⁸。

(13')(14')から見ていこう。これらは「といった」で言い替えられないことから、「同格」の例であることが分かる。しかし、実際に例を見てみると、(13')は唯一の人物である田中氏を候補が複数存在することを示す「とか」を含む「とかいう」がマークし、(14')も同じく唯一の指示対象である「エレファントファクトリー」を「とかいう」がマークしているが、それぞれ容認度は高い。しかし、この文脈で「人」「喫茶店」の候補が複数存在することが不自然であることは「といった」の容認度が低いことから先に確認したところである。その一方で「とかいう」には複数の前接項が想定できることも確認したとおりである。ということは、「といった」と「とかいう」とでは、複数存在する候補の質が異なると考えられる。そこで、その違いを考えたい。

(13')(14')の状況において「とかいう」が用いられる場合、何の候補が複数存在すると考えられるだろうか。これは、名前の候補、更に言えば、適切な言語表現の候補が複数存在することを表していると考えられる。つまり(13')(14')はそれぞれ、「田中」という人物や「エレファントファクトリー」という喫茶店が複数存在することを表しているのではなく、「田中」以外にも名前の候補があり得る（つまり、当該の人物の名前が「田中」で正しいか否かが定かではない）こと、「エレファントファクトリー」以外にも名前の候補があり得ることを示しているのである。このことから、「とか」が付与された引用形式は、指示対象ではなく、言語表現そのものが複数存在することを示すと考えられる。

これを受けて次に(15'')(16')を見てみたい。「とかいう」では容認度が低いという結果になっている。これを(13')(14')での考察をもとに考えると、(15'')(16')は、「といった」を用いることができるので「感無量」「無垢なる子ども」以外にも該当し得る感情は複数存在しても問題無いが、「とかいう」の容認度が低いため表現候補が複数存在することは問題であることを示していることになる。つまり、これらの例では、少なくとも言語表現自体は定まった候補が提示されていなければならないのである。それが(15'')(16')において「とかいう」の使用が許されない原因になっていると考えられる。

では、その理由は何か。本研究では次のように考えたい。これは「といった」を用いることが可能であることから、藤田(2000)に従うと「内容説明」の表現であると言うことがで

⁸ ただし、このテストを採用すると、(15)は「内容説明」で(15')は「同格」になるのかという疑問が生じる。しかし、これについて本稿では肯定的な立場をとりたい。(15)(15')の違いは(15')が自身の心情を述べている点にあった。よって、他人の心情を述べている(15)はその「表情」の内容について説明が必要であったが、(15')はその説明が不要であるため上記の違いが生じるのだと考えることもできよう。この両者の関係についての更なる考察は今後の課題とする。

引用形式が名詞句をつなぐ表現について

きる。そうした、NP2の内容を説明するはずのNP1が表現すら定まっていなかった状態では、とてもNP2の内容を説明することはできない。つまり、(15')や(16')において「とかいう」の容認度が低い理由は、「内容説明」を行っているにも関わらず、その「説明」のための表現が定まっていなかったというのは、「説明」の情報量が少なすぎると解釈されてしまう点にあると考えることができるのである。

以上、本節では「という」「といった」と「とかいう」を「同格」「内容説明」において用いる場合の差異に着目し、各形式の働きの違いについて考察した。

5. おわりに

本稿では、「という」「といった」「とかいう」の3形式が名詞句と名詞句をつなぐ表現間の差異について考察を行った。その結果、「という」と「といった」は前接項が唯一か複数の候補が存在するかどうかという点で対立しており、「といった」と「とかいう」は前接項が指示対象に複数の候補があり得るのか、表現そのものに複数の候補があり得るのか、という点において対立していることが分かった。

このことから、更に以下のことも言えよう。日本語は引用形式由来の様々な形式を用いて、言語表現を行う。その引用形式由来の表現は前接項が言語表現そのものであるもの（本稿で見た「とかいう」等がそうである）、言語表現は確定しているもののその指示対象が不明であるもの（ex.「鈴木さんって、誰ですか？」）、言語表現も指示対象も明かであるもの（ex.「鈴木さんって、面白い方ですね」）、といった様々な段階を表し分けているのである。

なお、こうした言語表現そのものへの言及を明示する形式というのは連体修飾特有のものではなく、主題形式にも見られる。岩男(2012)は、以下のような例を通して、引用形式由来の複合辞の一部の提示する主題が、その指示対象ではなく言語表現そのものに言及していると考えられると指摘している（岩男 2012 より⁹）。

(21) *やれやれ。うちの子といえば、あんな所で寄り道してるよ…。

(21') うちの子は、こっちの言うことを聞いてくれないんだよね…。そうそう。

うちの子といえば、さっきからあそこで走り回ってるんだけど、宿題は終わったのかな…。

岩男(2012)によれば、(21)に比べて(21')の方が容認度が高いのは後者の方が談話に既出の所与の表現を主題として提示しているという解釈が容易だからということになる。

それに対して「と」に動詞「来る」が後接してできた「ときたら」という形式で提示された主題はそうではなく、言語表現以外の時空間上の事物を指示していると考えることができる（岩男 2009）。

(22) やれやれ、うちの子ときたら、あんな所で寄り道してるよ…。

このように、連体修飾に限らず、引用形式が用いられた様々な表現において、当該の表

⁹ 岩男(2012)は他に「といったら」「という」とも言及しているが、ここで扱うのは「といえ

岩男

現が指示するものに言及するだけでなく、その言語表現そのものに言及することも起こり得るのである。

最後に今後の課題を挙げて論を閉じることにする。まず、本研究の結果と連体節との関係についても今後考察していかねばなるまい。本稿は名詞句同士が引用形式でむすばれた表現を考察した。この結果と引用形式の前接項が節の形をとる表現との関係については、今後考えねばなるまい。

また、先に、引用形式が指示対象が不明な名詞句を提示する場合もあれば、指示対象が分かっている名詞句を提示する場合もあると述べた。こうしたケース毎にどういった引用形式が使い分けられているのかといった観点からの考察も今後必要となってくるであろう。

参考文献

- 岩男考哲(2009)「『ときたら』文をめぐって—有標の提題文が意味すること—」『日本語文法』9-2, pp.105-121.
- 岩男考哲(2012)「『と言う』の条件形を用いた文の広がり」『日本語文法』12-2, pp.179-195.
- 岩男考哲(2014)「『ときたら』構文の意味と主題—提題文の体系化に向けて—」『日本語文法』14-2, pp.101-117.
- 大島資生(2003)「連体修飾の構造」『朝倉日本語講座5』pp.90-108, 朝倉書店.
- 大島資生(2010)『日本語連体修飾構造の研究』ひつじ書房.
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版.
- 小林幸江(1996)「『同格』をめぐって」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』22, pp.1-13.
- 寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集I』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法6』くろしお出版.
- 藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』和泉書院.
- 本多 啓(1996)「『という』についての覚え書き」『駿河台大学論叢』12, pp.105-127.
- 益岡隆志(2002)「複文各論」野田尚史他『複文と談話』pp.63-116, 岩波書店.
- 森山卓郎(1995)「並列述語構文考—「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐって—」仁田義雄編『複文の研究(下)』pp.127-149, くろしお出版.
- 森山卓郎(1997)「『うどんにマヨネーズかけたりして』—並列の意味」『言語』26-2, pp.56-61.

付記

本稿は日本語文法学会第14回大会(早稲田大学)のパネルセッション「名詞句間の関係に着目した名詞研究の可能性」において発表した内容に加筆修正を加えたものである。学会当日に様々なコメントをくださった方々に御礼申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費(2473073100,2433024302)の助成を受けたものである。

(2015年 2月12日 受付)
(2015年 9月 2日 受理)